

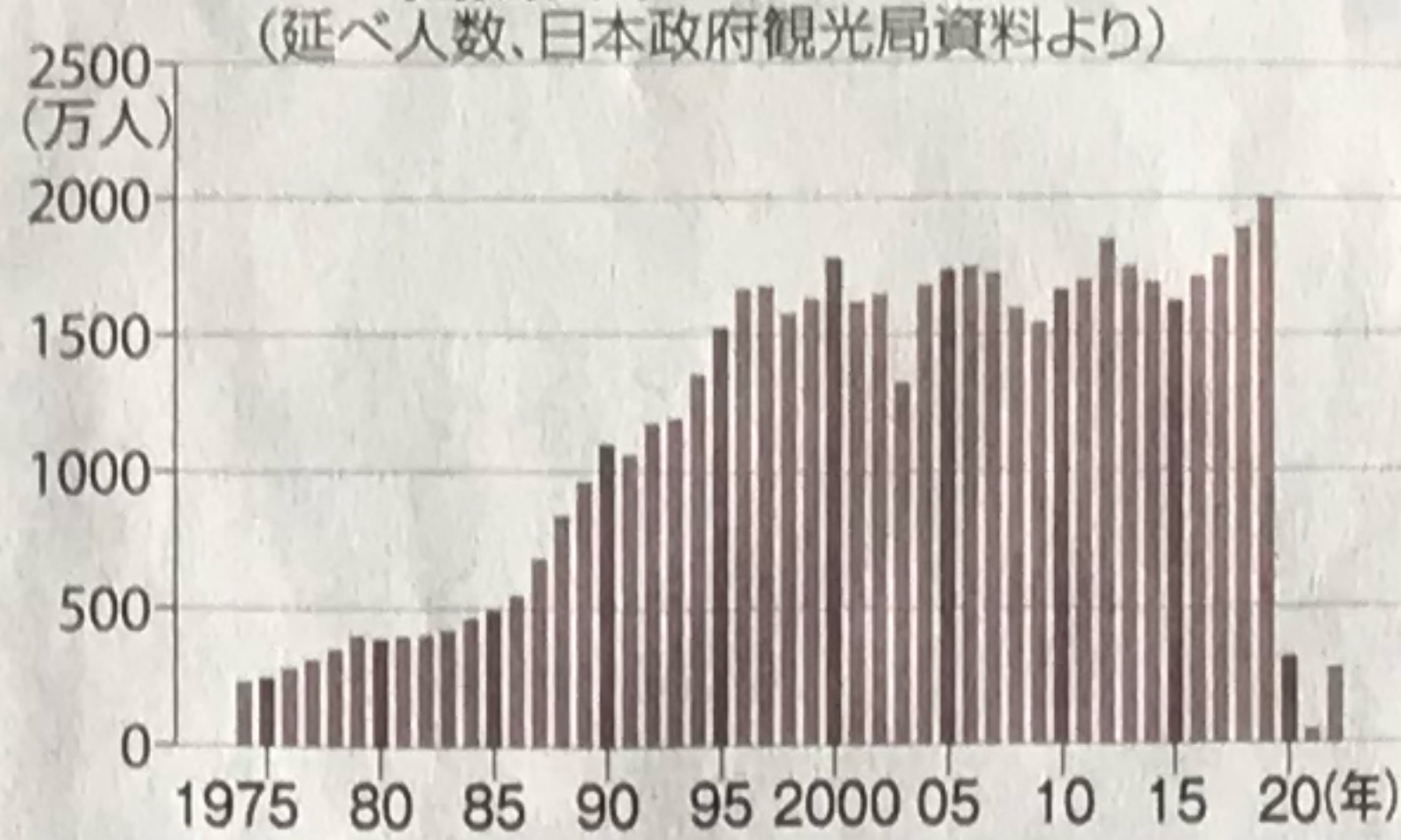
# 言葉の現在地 2023

## 栗岩英彦さんの主な放浪の道程

シルクロードに沿って汽車は走り続けた。一日中走っても砂漠だった。次の日も、また次の日も砂漠だった。汽車は砂の海を往く船のようなものだと知った。(「平成放浪記」より)



出国日本人数の推移 (延べ人数、日本政府観光局資料より)



新型コロナウイルス感染症が世界にまん延した3年間、多くの旅人が足止めを余儀なくされた。上川管内下川町でレストラン「モレーナ」を経営する栗岩英彦さん(79)はその3年間、2020年から昨年まで毎年1冊ずつ、若いころに国内外を駆け回った自らの旅行体験記を下川の仲間らの協力出版した。「昭和放浪記」世界一周に懸けた青春「平成放浪記」知られざる世界への旅「日本放浪記」小さな車の大きな冒険。3冊合わせてちょうど千円になる大作だ。旅人たちが再び歩き出した今、「さあ、旅に出よう」と栗岩さんは呼びかける。

静岡県生まれの栗岩さんは東京農大を卒業し、養蜂や物干しなどの行商で全国各地を回った後、1991年に下川町に移住し95年にモレーナを開店した。「根っから

## 世界中を歩いてみたい

### 国内外を放浪し下川へ移住 栗岩英彦さん

# 今も心は旅を続けている



下川の木々を背景に旅の思い出を語る栗岩英彦さん

の旅好きでアジアや欧州、アフリカ、南米、オーストラリアなど世界中を旅して回った。  
「昭和放浪記」は74年(昭和49年)〜75年、当時の妻と横浜港から旧ソ連ナホトカに船で渡り、シベリア鉄道経由で欧州を旅し、中東などを経てインドに滞在した体験記。「平成放浪記」は89年(平成元年)〜90年、香港から中国に入り、汽車やバスでシルクロードを経てインドへ。その後スペインを自転車で回った旅の記録だ。いずれも1年半近くを異国で過ごした。「日本放浪記」は78年にミニバンに荷物を積んで日本列島を回

った思い出をつづつた。  
「昭和放浪記」にはこんな記述がある。〈旅は風まかせ。予定は未定。インターネットはない。海外旅行者が重宝したガイドブック「地球の歩き方」もなかった。学校で使った世界地図帳と、旅先で出会った旅行者や地元の人々の情報に頼りだ。バスや汽車を待つ間に日記を書いた。今も地図や土地の名が記憶を呼び覚ます。訪れた国の数を競う旅ではない。「見知らぬ土地で、人々がどんな暮らしをして、何を考え、何を食べ、どんな文化を育んでいる

のか、自分の目で見て、触れる。そんな旅です。栗岩さんは話す。「もともと人間には知らない土地に行ってみようという気持ちに潜在的にある。私はその気持ちに素直に生きていくだけです」  
30歳を過ぎて初めてインドで過ごした時間が人生観を変えたという。都会の便利な生活より自然の中でシンプルな暮らしを求めるようになった。「お金やものではなく精神的に満たされる生活がしたくなった」。世界中を旅して回った栗岩さんが下川に移住したのも、そんな思いからだ。

栗岩さんは十数年前に脳梗塞で倒れてから海外には行っていない。それでも「毎日旅しているような感じですよ」と話す。モレーナには旅人もよく来る。数カ月間、店や畑作業を手伝いながら泊まってく人もいる。「今の若い人は旅をしないなんてことはない。スマホばかり見ているのかと思ったりそういう子ばかりじゃない。おもしろいですよ。自分が旅しなくても、ここにいるだけで世界中の情報が入ってくるんだから」  
栗岩さんが初めて海外に出発した74年に日本から海外に出かけた人(出国日本人数)は年間230万人台だった。それがバブル期の90年に1千万人を超え、2019年には2千万人に達した。しかしコロナ禍で20年は317万人、21年は51万人まで落ち込んだ。  
「平成放浪記」に「人生は旅である」という一文がある。「旅をするといういろんなことを学ぶ。知らなかった世界が見える。でも旅をしたくてもできない人、日々の仕事に追われて行けない人もいっぱいいる。心の中で、いつか旅に出たいと憧れている人は多い。そういう人たちがもっくるめた人生そのものが旅なんだと思います」

(編集委員 関口裕士)

「世界中をこの足で歩いてみたい」

それが少年の時から夢だった。

(「昭和放浪記」より)

栗岩さんの「放浪記」3部作。帯カバーの水彩画も栗岩さんが世界や日本の各地で描いた



「昭和放浪記」「平成放浪記」「日本放浪記」は各1900円。モレーナ(電話、01655・4・4110)で販売し、ホームページからも注文できる。

### 道

いつの時代にも

旅人は道の上で夢を見

道の上で孤独な夜をすごし

道の上で人々と出逢い

はらかな国のことを人々に語った

いつの時代にも

どんな時代にも

道は君が来るのを待っている

ぬるま湯にひたるような生活をやめよう

ポケットの中の小さな勇気を握りしめよう

見知らぬ広い世界に向かって

旅に出よう

君の家の前から

道は世界の果てに続いている

道は君が来るのを今日も待っている

(「日本放浪記」より)